

未 病 (2)

1、前回（平成 25 年お盆）にお話ししました「未病」の続きです。「漢方」は約 2 千年の歴史がありますが、特に江戸時代には一般向けの養生書等が多く出版され、以降、漢方医学は未病を治す医学だなどと、体調の不具合を体全体の健康を保つ、ある種の理想を示すものとして扱われてきています。しかし、明治以降、西洋医学が新しい医術として輸入されて以来、身体の特定期所の不具合を、解剖などの成果を踏まえ、直接病の個所に科学的な薬を投与したり、注射したり、解剖して病根を無くす近代医学が発達し、今日に至っていますことは皆さまご存知のことです。昔の医師は聴診器をあて、指で体を叩いてその音の変化などで診断したものでした。しかし、現代の内科ではまず血液の酸素濃度を測定器で測り、血圧を測定し、喉をのぞき、具合の悪いところを聞診して見当を付けます。さらに進んで、採血し、コンピュータに血液の測定データや患者の訴えをインプットして自動的に病名検索され、その病名に対応する多くの薬の中から選択して処方箋をアウトプットします。レントゲン・MRI・CT スキャンなどの造影を活用した診断、遺伝子解析など、これが現在の先端医学です。

2、しかし、中国最古の医学書『^{こうていなきょう}黄帝内経』は、原本は伝わらず平安末期京都の仁和寺に国宝として所蔵、隋の頃「^{そもん}素問」「^{れいすう}霊枢」に二分、素問とは人体の生理・病理を説き、霊枢は鍼灸などの治療と説き、黄帝と岐伯ら 6 名との問答形式で書かれ、中国医学第一の古典として日本でも重視されています。

同書には「肝熱病はまず左の頬まず赤かし」。「心熱病は顔まず赤かし」。「脾熱病は鼻まず赤かし」。「肺熱病は右のほほ頬赤かし」「腎熱病は頤まず赤かし」。病、未だ発せざるに赤色を見てこれを刺す（ハリをする）。名づけて未病を治すという。）とあるようです。（以降主に、松柏堂医院—中村先生発行の『歳寒松柏 193、194 号』を部分引用及び参考とさせていただきました）。

3、これは漢方の診察術の「望診」、現代の「視診」に相当するもののうち、顔面の色の変化を見て、内臓の変化を察知する、面相を観る＝観相の記述です。どの部分が赤く変化してことをよく見れば、どの臓器の熱病の兆候かがわかるは筈です。その時点で「刺す（ハリ治療を開始する）」こと。これを「未病」を治すと名づけます。

4、これは中国の^{ごぎょうせつ}五行説で体内の心・肝・脾・肺・腎を「五蔵」といい、現代でも「酒が^{ごぞうろつぷ}五臓六腑（長・胆・胃・膀胱・三焦・消化排泄）にしみわたる」とよくいいます。身体を宇宙にたとえ、顔面にもその五蔵が分布しているというものです。また、同書の解説書のひとつ『^{なんきょう}難経』には「未病を治すとは、肝の病を見て、肝まさにこれを脾に伝うを知りて、まずその脾気を実して（補って）、肝の邪を得ざらしむ。故に“未病を治す”とあります。

5、これも五行論（天地の間に循環して停息しない五つの元気）の一つ、五行の^{そうこくせつ}相克説（二つが勝とうして相争うこと）を応用した“未病を治す”ことで「木火土金水」という自然界の五行は、「木は土を克くす、土は水を克くす、土は水を克くす、水は火を克くす、火は金を克くす、金は木を克くす」という関係があります。ここで「克くす」とは「勝つ」という意味で、このように循環するのが五行の「相克説」です。

6、これを身体の蔵器に当てはめると、木＝肝（肝臓）、土＝脾（脾臓）です。相克説によって、肝が病めば悪影響が「木克土の関係」＝「肝克脾の関係」で脾（脾臓）に影響が及ぶだろう。だから脾の気をあらかじめ実して（補って）肝の邪の悪影響が及ばないように手を打つのが「未病を治す」ことだと示しています。

7、顔の^{おもて}面に赤みがさした段階で、病んでいる体内の蔵器はどこかを推測します。病のこれかの進展具合を類推して、先回りして、いち早く治療の方策を講じる、これで未病の対策ができると述べています。これは大宇宙を身体にたとえて体の一部である顔を相似形に縮小反映して小宇宙として見る中国古代の考え方「天人合一思想」の一つです。したがって病の前兆の「熱」病の特徴である「赤かい」傾向が顔面の五蔵、「ほっぺた?」、「あご?」、「全体?」などどこに現れているか、場所によって五蔵自体の病気を予測できるというものです。

この考え方は、現在でも、ハリ・マッサージ医師などでも治療に活用されています。（つづく）